

旅行中ノ窮乏

松下塾潜伏中ノ辛苦

歸萩野村ニ邂逅

カニ燈光ヲ認メテ近ツキ見ルニ旅店ナリ是則チ幸ヒト懷中ヲ顧ミレハ藩札三匁ト一文錢三枚アルノミ店ニ入テ宿料ヲ問フニ三匁ト答フ乃チ投シテ一夜ノ安眠ヲ食レリ翌朝泥土ノ固着シタル前日ノ破草鞋ヲ穿チ旅店ヲ出發シテ行クト二三里路傍偶々破草鞋ノ棄タルヲ見ル乃チ其完全ナル一箇ヲ擇テ之ヲ穿チ更ニ復タ此ノ如クニシテ兩足遂ニ全キヲ得タリ午後ニ至リ空腹ヲ感スルト甚タシト雖ヒ囊中已ニ空虚ナルヲ以テ如何トモスルヲ能ハス路傍ノ茶店ニ休憩シテ苦茶三碗ヲ喫シ一文錢三枚ヲ投シテ去ル而シテ薄暮漸ク萩ニ入り松本ノ市街ヲ避ケテ河堤ヲ上リ將サニ大橋ニ近カントス擊劍ノ具ヲ肩ニシテ前面ヨリ來ル者アリ余ハ之ヲ避ケテ急歩シ去ラントス渠レ呼テ云ヤト堀ニ非スヤト驚テ願ルニ野村和作ナリ蓋余カ黒キ笠ヲ被リ白キ袴ヲ穿チタルハ初メ萩ヲ去ルトキノ旅裝ト同シキヲ以テ之ヲ知リタルナリト云兎ニ角我宅ニ來レト相伴テ其宅ニ抵リ留ルト數日余ハ更ニ九州ニ遊ンテ其形勢ヲ探ラント欲ス而シテ同志者相談ツテ以爲ラク一ト先松下塾ニ潜伏シテ時機ヲ待ツニ若カスト因テ塾ニ入テ少

久坂・高杉等と共に戦った八幡隊総督の半生

維新回顧録叢書 5

限定三八〇部復刻



堀 真五郎
維新回顧談

傳家録

久坂江戸
リ歸ル
河本杜太郎
來ル

年ニ素讀ヲ授ケ筆耕ノ料ヲ以テ糊口ノ資ニ充ツ其原本ハ杉民治ノ給スル所ニシテ總テ松陰先生ノ著述ナリ於是資ヲ得レハ則チ食シ資盡レハ則チ食セス塾友ノ余カ境遇ヲ知ル者ハ時ニ來テ竊ニ竈ヲ見ル如シ炊爨ノ痕ナキトキハ資ノ盡キタルヲ察シテ食ヲ贈ル者アリ或ハ招テ饗應スル者アリ時ニ街説アリ云外國船來テ萩海ヲ測量シ且上陸スルヲアルヘシト果シテ然レハ之ヲ要撃セント松浦龜太郎ニ議ル松浦之ヲ共ニセント約ス中谷正亮之ヲ聞テ大ニ驚キ其不可ヲ論シテ止マス外國船モ亦來ラサリシ而シテ十月十一日久坂玄瑞江戸ヨリ歸リ十一月十六日河本杜太郎ナル者來萩シ屢々塾ニ來テ國事ヲ談ス一夜相伴フテ檣崎彌八郎ヲ訪フ河本ハ身軀矮小ニシテ肉瘦セタリ而モ長刀ヲ佩ヒテ頗ル異様ナリ其歸途ニ於ケルヤ大聲激語以テ時事ヲ語ル行人怪ンテ顧ミサル者ナシ其萩ヲ出發スルヤ寺島忠三郎ト共ニ送テ大谷ニ至ル例ノ如ク大聲以テ共ニ江戸ニ赴カンヲ勸ム後ニ坂下門ニ於テ安藤對馬守ヲ要撃シタル一人ノ葦原邦之助ハ即チ此河本ナリト云

高杉ト人物
論ヲ交換ス

酒ヲ命シ且妓ヲ聘ス暫時ニシテ妓來ル腰圍拱把大ノ老嫗妓ナリ相見テ惘然勿々トシテ還ル而シテ船中寂寥高杉云相互ノ人物評ヲ交換スルモ亦一興ナラスヤト余云可ナラン君ハ英雄ナレトモ其才未タ熟セスト高杉聲ニ應シテ云君ハ亂世ノ英雄治世ノ亂賊ト蓋亂賊ヲ以テ未熟ノ一言ニ酬ヒタルナリ

岡本三右衛門ノ義俠

高杉謹愼ス

御親兵設置

四月八日船ノ富海港ニ著スルヤ乃チ浴シテ一酌ヲ催シ翌朝宿料ヲ還算シ別ニ金二朱ヲ投シテ茶代ト爲ス囊中已ニ一文錢ナシ因テ両箇ノ荷物ヲ一括シテ竹竿ニ貫キ高杉ハ例ノ如ク大ナル坊主笠ヲ被リ短刀ヲ腰ニ吊シ各其一端ヲ肩ニシテ岡本三右衛門ノ宅ヲ宮市ニ訪フ岡本ハ國書ヲ讀ンテ和歌ヲ能クシ櫻園ト號ス亦有志者ノ一人ナリ時事ヲ談シ酒肉ヲ饗シテ款待ス即チ一泊シテ翌朝金貳両ヲ借り茲ニ初メテ暴富ノ思ヒアリ籃輿ヲ飛シテ此日ノ薄暮萩ニ歸ル翌日高杉ノ宅ヲ訪ヒ面會ヲ乞フ高杉辭シテ云今ハ謹愼ノ身トナレリ他人ト相見ルコトヲ得スト

中村九郎告テ云我藩ノ建議ニ係ル御親兵ノ貢獻ハ已ニ採納ノ命アリト雖

『伝家録』について

東行記念館学芸員 一坂太郎

幕末から明治にかけて活躍し、あらゆる史料に名をとどめながらも、その全生涯となると、ほとんど知られていないという人物が意外に多い。まとまった伝記となると、人名辞典に掲げられた略歴程度しか無いのだ。

堀真五郎も、どちらかといえばそんな人物の一人である。ただし彼は晩年になって『伝家録』という回顧録を著したから、維新前後の事蹟は、ある程度知ることが可能だ。

『伝家録』で堀は、八幡隊^{はちまんたい}総督として高杉晋作や久坂玄瑞と共に長州藩尊王攘夷運動の急先鋒として数々の幕末の事件にかかわり、戊辰戦争を経て箱館府に赴任した経緯を、多くの原文書を交えながら詳述する。そして明治四年に官界を去って帰省し、八年に再び官途に就くところで唐突に終わる。そこが堀自身の中での、ひとつの時代の区切り目だったに違いない。

「堀真五郎」という名を聞いて私が真つ先に思い出すのが、目的が記されていない謎の血盟書のことである。

文久三年（一八六三）前半、高杉晋作が京都で「憤激」の末、血盟して「何か」を起こそうと企んだことがある。が、同志は「遅疑」して応じなかった。ただひとり入江九一（翌年、禁門の変で戦死）だけが、三月二十日に率先し血盟した。のちに晋作は堀と共に海路、帰国の途についたため、計画は果たせなかった。その船中で四月二日、晋作と堀が血盟している。ちなみに堀の書いた部分は「志を事業に立て、力を邦家に尽し、死を天朝に致す。諸君これを以て責む。凡民敢えて辞せず、神祇照覧。堀義彦（血判）」となっている。過激な尊攘運動に挺身する者たちですら、遅疑した晋作の計画とは一体何だったのか。目的を記さないところを見ると、よほど重大なことだったと考えられるが、とにかく分からない。「三烈士血盟書」と題されたこの史料は高杉家に伝わり、現在は東行記念館に蔵されている。

後年になって堀は『伝家録』で、船中において晋作とお互いの人物評を交換した逸話などを回顧してはいるけれど、血盟書については一切触れていない。晋作との密約を守ったのか、それとも半世紀を経て忘れてしまったのか。不思議なことであり、残念なことでもある。

『伝家録』執筆の目的は、子孫に自らの維新史を残すことにあった。外部に出すことを前提に書いたのではないだろうが、堀没後二年余りを経た大正四年（一九一五）六月、息子栄一によって私家版として出版された。原本は他の堀家文書と一緒に大正十二年、関東大震災で灰燼に帰したとのことなので、出版しておいた意義は大きい。一個人の回顧録を遥かに超えた、貴重な維新史料であるからだ。さらに昭和四十三年（一九六八）十月には明治改元満百年を記念し、孫真道によって出版された復刻版もある。

「維新回顧録叢書」について

この叢書は、東行記念館学芸員一坂太郎監修で平成六年に始まりました。

第一回配本として次の三点を同時に刊行しましたが、その後は小社の都合で延び延びになっていました。

おかげさまで三点ともすぐに売り切れております。今回も三八〇部限定なので、早めにご注文ください。

①七卿回天史松巻

東久世通禧文・田中有美画・田中彰監修

②伊藤井上二元老直話 維新風雲録

末松謙澄編

③長州諸隊 維新戦役実歴談 児玉如忠編

■体 裁 A5判 二九〇頁

■定 価 クロス装製上製箱入

■予約特価 七千円（千380）

■予約特価 六千円 //

■三点セット特価あり

■特価締切 11年6月20日

■発売 11年7月下旬

■限定三八〇部（番号入り）

▼直販につき書店卸不可。

徳山市銀座二の二三 マツノ書店
☎〇八三四〇二九五